技術者からの視点

●第37回●

デジタル・デバイド

藍野大学非常勤講師　木下　親郎

情報化社会における格差

広辞苑では、デジタル・デバイドを「パソコン・インターネットなど情報技術を使う能力の差によって生じる個人間・国家間の経済的格差。情報格差」と記している。90年代後半から使われるようになった言葉で、米国商務省は、1999年に「コンピューターを持ち、インターネットに接続している世帯と、そうでない（ネットからこぼれ落ちる）世帯の関係をデジタル・デバイド」とする報告書を発表している。日本でも、総務省が2008年に「わが国においては、ブロードバンドや携帯電話について世界で最も進んだサービス提供が実現しており、これらのサービスは国民生活や社会経済活動に必要不可欠なものとなっている。しかしながら、これらのサービスの利用については依然として地域間格差（デジタル・デバイド）が存在している」と分析している。ブロードバンド（広帯域幅）は、大容量の信号を高速度で伝送できるネットワークの意味で使われており、光ケーブル回線が代表的なものである。

インターネットの善し悪し

ブロードバンドは、マスメディアにとって、大きな武器となった。3月11日の東日本大震災では、当日のテレビ放送がインターネットでも発信された。また、CNNは地震の直後から、押し寄せる津波の状況をネットテレビで伝えた。その後も、世界中のマスメディアが、インターネット上で高精細度写真やビデオを使って、被災地や被災者、津波の猛威、原発建屋の破損状況を伝えている。イラク戦争の際に、記者やカメラマンが軍隊とともに行動し、最前線の状況を報道したのは特別な事例だが、マスメディアが、重大事件の詳細を政府発表の前に報道していることが多く、また、政府報道担当者が行う公式会見の一言一句が世界中で注目される時代になった。

マスメディアによる通常のインターネットの情報も、ブロードバンドに対応している。米国紙の大リーグ欄は、その時点での打席のボールとストライクの数、塁上の選手、次打席の選手名等の実況と同時に、登録全選手の入団時から現在までの成績を常時更新しながら掲載している。政府機関、大学研究機関、学術団体もウェブサイトを魅力的なものにする努力を行っている。特に過去の記録（アーカイブ）の紹介に力を入れている。我々は、ノーベル賞のウェブサイトを通じて、1994年に行われた大江健三郎氏のノーベル賞受賞講演を聴くことができる。新刊書の電子版は、ハードカバーの店頭発売と同時に、インターネット経由で販売されるものもあり、書店は存亡の機にある。著作権の切れた文学作

品は、電子化され、インターネットで無料公開されるものが増えている。インターネット図書館「青空文庫」にある芥川龍之介の作品は300点以上になる。米国の「プロジェクト・グーテンベルク」は3万点以上の作品を提供している。

個人もブロードバンドを享受している。音楽や動画の送受信やゲームに没頭し、またインターネット・オークションや通信販売を楽しんでいる。未知の人たちとの匿名電子メールの増加も止まるところを知らないようだ。会員制のインターネット網であるソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）も、入会資格が緩和されて会員数が爆発的に増え、北アフリカでは政権崩壊の引き金となる原動力の一つとなった。さらに、個人的な「つぶやき」や鳥のさえずりのような情報が、「ツイッター」として公に発信されている。このような、膨大なデジタル情報の山から、必要で、かつ安全な情報を選び出すのは至難の業である。そのための道具として、各種の検索エンジンが作られており、インターネットの利用者が、検索エンジンに支配されかねない状況だ。

「メディアリテラシー」が重要

ところで、我々が情報を求めるのは、その事柄について判断をくだすためである。そのためには、入手した情報の価値を判定できる能力を持たねばならない。読み書きの能力を「リテラシー」というが、メディアが伝える情報を批判的に判断する能力のことを「メディアリテラシー」という。情報の洪水の中にいる21世紀の人々にとって、最も大切な能力である。緊急とか重大という報道が、時々刻々と変化する事態のある瞬間をとらえたもので、誤りが伝えられることも多いと思う。東大の物理学教授であった寺田寅彦が「一つの思考実験」（1922年）で、「私は今の世の人間が自覚的あるいはむしろ多くは無自覚的に感じる色々の不幸や不安の原因のかなり大きな部分が、『新聞』というものの存在と直接間接関係をもっているように思う」、「私はあらゆる日刊新聞を全廃する事によってこの世の中がもう少し住心地のいいものになるだろうと思っている」と書いている。

価値ある情報の発信を

ブロードバンドの特徴の一つは、より自由な受信と送信の双方向性である。情報社会に生きる我々は、入ってくる情報の価値を評価するだけでなく、価値のある情報を発信できるように心がけねばならない。短文の「つぶやき」を読み漁り、それに相槌を打つという情報交換を繰り返していると、じっくり考える時間がなくなってしまう。映像も受身だ。しかも情報量が多いので、頭を素通りすることが多い。感銘して、一部の映像を記憶にとどめたつもりでも、改めて映像を見てみると、異なっていることがある。一方通行の講演や訓話も受身だ。感心した話でも、その場を離れた途端、論理の矛盾に気が付くことがある。技術者の世界では、厳密な批判に応えられる文書（仕様書）と、その妥当性を示す検証作業の資料の呈示が情報発信である。「つぶやき」のデジタル世界に埋没してしまうと、実は情報発信の点では弱く、新たな意味でのデジタル・デバイドを生むことになる。